

小原國芳における国際交流への視座

—— 海外講演（1955 年）に関する資料を手がかりに ——

佐久間裕之（教育学部）

小原國芳・チンメルマン・国際交流・異文化理解

1. はじめに

小原國芳（1887-1977）の国際交流に関する研究が、近年のドイツ語圏で新しい局面を迎えている。周知のようにドイツ語によって公表されている小原研究には、これまで 1950 年代のチンメルマン¹（Werner Zimmermann）によるもの（Zimmermann, 1954, 1957）、1970 年代のエームケ（Franziska Ehmcke）によるもの（Ehmcke, 1979）が知られている。特にチンメルマンは、玉川学園へ 6 度の訪問・滞在を経験しており、2 度にわたる小原のヨーロッパでの講演旅行をもとに、彼の国際交流の様子を広くドイツ語圏で紹介する立役者となった。また、エームケの研究は、ドイツ語圏で登場した小原に関する最初の博士論文となっている。彼女は、小原のヨーロッパ講演旅行や海外との交流を分析し、彼が日本と西洋との「相互理解への教育」（die Erziehung zum gegenseitigen Verständnis）を促進しようとしていた点を指摘している（Ehmcke, 1979, S. 135）。これらの研究は、いずれも国際交流に関する小原の評価すべき特質を提示したものと言える。それに対して、近年、小原に関する批判的研究がドイツ語圏で公表された。この研究は、新教育に関する一連の批判的研究を行っているエルカース（Jürgen Oelkers）の系譜に属するもので、サイド（Edward E. Said）の『オリエンタリズム』（1978 年）を援用したものとなっている。それによると、チンメルマンは「オリエンタリズム」（Orientalismus）の立場に立ち、小原は「セルフオリエンタリズム」（Selbstorientalismus）の立場に立つという。そして、「チンメルマンも小原も異文化との真剣な取り組みを目論んではいなかった」（Ito, 2012, p.49）としている。

本稿の主眼は、小原國芳とチンメルマンの著作物の

検討を踏まえて、小原における国際交流への視座が如何なるものであるかについて明らかにすることを目的とする。このことを通じて前述の小原に関する批判的研究の妥当性についても検討していきたい。その際、本稿では小原による 1955 年の海外講演に着目する。というのも、この講演に関しては、小原とチンメルマンの双方による詳細な報告が存在しており、さらに小原が行った講演原稿のチンメルマンによるドイツ語訳、および小原の講演に対する第三者の報告も存在し、客観的な研究が期待できるからである。

2. 海外講演（1955）の位置

小原は『世界教育行脚』（1956 年）の中で、彼自身が行った「大きな意味での外国旅行」は 1955 年が「たった三度目」であると記している（小原、1956, p.1）。その第 1 回目は 1931 年のことで、これが小原にとって初めての海外講演の旅となった。海路を使って妻・信子とともに「東廻り」の航路で出発した小原は、アメリカ、カナダ、メキシコ、そしてイギリス、デンマーク、ドイツ、オランダ、ベルギー、フランス、スイス、イタリア、エジプト、インド、スリランカ、シンガポール、香港をめぐる。この旅行はスイスの友人チンメルマンの誘いを受けて実施されたが、アメリカへ帰国していた恩人ミス・ランシングを見舞うためでもあった（南日本新聞社編、1977, p.212）。

第 2 回目は 1938 年のことで、彼は「ホンの短い旅行でした」と述べている（小原、1956, p.4）。これも海路を使い、具体的にはアメリカ（ハワイ、カリフォルニア）のみの訪問となっている。しかしこの旅行は、アメリカと日本の関係に陰が見えた状況の中で「ゼヒ、日米間に国交破綻が来ないように」、「アメリカに少しでも友人を持つとる者の責任」（小原、1956, p.4）と先輩からの誘いを受けて出発したのであった。

そして、第 3 回目となったのが、1955 年の海外講演の旅である。この時、小原は当時まだ珍しかった空路を用い「西廻り」でヨーロッパへと向かった。訪問国

¹ 小原國芳は Werner Zimmermann を「チンメルマン」（小原、1956, p.273）または「チムメルマン」（小原、1969, p.34）と訳している。近年の研究では「ツィンマーマン」と訳される場合もある（伊藤、2004, p.133）。なお、本稿では「チンメルマン」を用いる。

はマニラ、タイ、インド、パキスタン、イタリア、スイス、オーストリア、ドイツ、デンマーク、スウェーデン、フィンランド、ノルウェー、イギリス、ポルトガル、セネガル、ブラジル、アメリカであった。この旅でヨーロッパへ赴くことになったのも、チンメルマンの誘いによるものであった。しかし、敗戦後10年とはいえ、当時の日本はまだ1956年12月の国連加盟前であり、国際社会への復帰を果たしていなかった。また、国外へ持ち出すことのできる金額に制限が設けられていたため、第1回目のように妻と一緒に連れて行くことができなかった。

さて、今回の旅で小原は、戦後のヨーロッパ、とりわけドイツの様子を見に行きたいと思っていた(小原、1956、p. 8)。日本同様に第二次大戦で敗戦国となったドイツであるが、特に自国の教育を尊重するあり方は日本と対照的であったし、また、優れた学校現場の見学も目論んでいたからであった。

ところで、ここで留意すべき点は、これら3回の外国旅行について、彼が「大きな意味での」と限定している点である。換言すれば、彼は実のところ、この3回以外にも複数にわたる海外訪問²を実施している。『玉川教育——玉川学園三十年——』によれば、玉川学園が開学した1929年から1955年までの間で、前述の3回にわたる大規模な海外旅行を除けば、朝鮮、台湾、中国、アメリカ等への訪問が、合わせて、少なくとも7回以上に及んでいることが把握される(玉川学園編、1961、p. 29-51)。

さらにまた、こうした小原自身の海外訪問以外に、この間、玉川学園の教員や生徒の海外派遣と、海外からの来訪者や学園への編入者の受け入れを積極的に行っていたことも注目すべき点と言える(玉川学園編、1961、p. 29-51)。

さて、このように概観すると、1955年の海外講演の旅が、突出した特別な事例ではないことが理解される。しかしながら、この講演に関しては、前述したとおり、小原自身とチンメルマンによる詳細な報告が公表されており、また、当時のドイツで彼の訪問がどのように受け止められていたかを知ることのできる新聞記事も残されている。小原による1955年の海外講演に関する

報告は、前述の『世界教育行脚』(1956年)である。この中に、旅行中に起った種々の出来事、講演時の様子、学校訪問時に小原が考えたこと、チンメルマンをはじめ旅行中に巡り合った人物たちへの小原の評価が記されている。ただし小原自身、1931年及び1938年の海外訪問については、多忙のため、まとまった報告を残していなかったため、本書の中に1931年及び38年のエピソードも挿入するとしている点には注意が必要である(小原、1956、p. 7)。

一方、チンメルマンによる講演の報告には、小原の講演時の様子、および小原の英語による講演原稿をドイツ語に訳した内容が掲載されている。また、チンメルマンによる小原評も含まれている(Zimmermann, 1955b, 1957)。両者を合わせて読むことによって、小原とチンメルマンが相互にどのようにお互いを捉えていたのかを把握することができる。さらに、この講演について、ドイツの人びとがどのように受け止めたかを知ることのできる資料として、ドイツの新聞『シュトゥットガルト・ツァイトゥング』に掲載された小原に関する1955年5月17日付の記事を挙げることができる(Stuttgarter Zeitung, Dienstag, 17. Mai 1955, S. 15)。以下においては、ドイツのシュトゥットガルトにおける講演を中心として、小原、チンメルマン、新聞記事それぞれの記述内容を追っていくことにする。

3. 海外講演(1955年)の計画

さて、小原國芳による海外講演(1955年)の計画はどのようなものであったか。まず、当時の講演計画が明らかにされているので、それを見てみることにしよう。

Vorträge Obara und Werner Zimmermann			
Kuniyoshi Obara, der Gründer und Leiter der Tamagawa Universität bei Tokyo, wird mit Werner Zimmermann als Übersetzer sprechen über Japan heute und Erziehungswerk Obara. Endgültige Liste der Vorträge in Mittel-Europa:			
5. Mai Donnerstag	20 Uhr	Zürich, Konservatorium (Reformhäuser)	
6. Mai Freitag	20 Uhr	Bern, Schulwarte (Reformhäuser)	
9. Mai Montag	19.30 Uhr	Wien, Mozartsaal (Naturheilverein, Esterhazygasse 30, Wien VI)	
10. Mai Dienstag	19.30 Uhr	München, Deutsches Museum (Posthof) (Drei Eichen Verlag, München 9)	
11. Mai Mittwoch	20 Uhr	Nürnberg, Buchersäle (Voll, Geistesstraße 13)	
12. Mai Donnerstag	19.30 Uhr	Stuttgart, Siegle Haus (Striffler, Brachetweg 19, Sigolfsmaden)	
13. Mai Freitag	19.30 Uhr	Darmstadt, Aula Ludwig-Georgs-Gymnasium (Peters, Moltkestr. 45)	
14. Mai Samstag	19 Uhr	Berlin-Chbg., Festsaal Schillerschule, Ernst-Reuter-Platz (Elsa Hahn, Roscherstr. 12, Charlottenburg 4)	
15. Mai Mittwoch	19.30 Uhr	Hamburg, Curiohaus, Rothenbaum-Chaussee 9-13 (Curt Rapke, Lindenstr. 11)	
Man erkundige sich örtlich, ob die Angaben stimmen. Vorverkauf und Werbeblätter bei den erwähnten Adressen. Vorträge auch in Helsinki, Oslo, Stockholm. Besuch in Dänemark, England, Dann Nord- und Südamerika, dies ohne Werner Zimmermann.			

図1 中央ヨーロッパにおける講演案内(1955年)

² ただし、小原が『世界教育行脚』(1956年)の冒頭で、「台湾や朝鮮や満州が今は外国となった今日です」(小原、1956、p. 1)と述べているように、ここで挙げられた台湾・朝鮮・満州への訪問は、当時、外国訪問ではなく外地訪問といった位置づけであった。

雑誌『ドライ・アイヒェン・ブレッター』1955年5月号には、図1の講演案内が掲載されている (Drei-Eichen- Blätter, 1955b, S.41)。これは「中央ヨーロッパにおける講演の最終的なリスト」(以下、「最終版」と略記)として掲載されたものである。このリストのタイトルは、「講演 小原とヴェルナー・チンメルマン」(Vorträge Obara und Werner Zimmermann)となっている。このことから、講演は小原単独のものではなく、小原とチンメルマンの2人によるものとされていることがわかる。前述の表題に続いて、次のような小原及び講演内容の紹介が記されている。

東京近傍にある玉川大学の設立者で学長の小原國芳が、通訳者のヴェルナー・チンメルマンとともに「日本のいま」と小原の教育活動について語ります。

(Drei- Eichen- Blätter, 1955b, S.41)

続いて、中央ヨーロッパの講演日程が表1のように示されている(講演会場については割愛)。

講演日	開始時間	国名	都市名
5月5日(木)	20時	スイス	チューリッヒ
5月6日(金)	20時	スイス	ベルン
5月9日(月)	19時30分	オーストリア	ウィーン
5月10日(火)	19時30分	ドイツ	ミュンヘン
5月11日(水)	20時	ドイツ	ニュルンベルク
5月12日(木)	19時30分	ドイツ	シュトゥットガルト
5月13日(金)	19時30分	ドイツ	ダルムシュタット
5月14日(土)	19時	ドイツ	ベルリン
5月18日(水)	19時30分	ドイツ	ハンプルク

表1 小原の講演日程(1955年5月5日~18日まで)(筆者作成)

なお、表1の日程は、あくまで「中央ヨーロッパ」におけるもののみであり、前述の図1の終わりには「講演はヘルシンキ、オスロー、ストックホルムにおいても」と記されている。このように、講演計画はかなり過密なスケジュールとなっていることがわかる。小原自身「全くの飛脚便みたような旅行なので、キリキリ舞いで」(小原、1969、p.300)と記しているように、講演先を毎回変えながら(旅をしながら)講演するのは、相当に苛酷であったはずである。しかし、小原は「毎日、元気だ。よく眠れる」とも記している(小原、1969、p. 300)。

ところで、図1の講演計画に先立って公表された講

演計画(以下、「暫定版」と略記)もあり、それは図2のとおりである。これを「最終版」と比較してみると、いくつかの興味深い点が見えてくる。まず、講演のタイトル部分であるが、「最終版」では、「講演 小原とヴェルナー・チンメルマン」となっていたのに対して、「暫定版」では、「講演 ヴェルナー・チンメルマン、小原と共に」となっている。また、小原および講演内容の紹介は次のとおりである。

VORTRÄGE
Werner Zimmermann mit Obara

Kuniyoshi Obara, der Gründer und Leiter der Tamagawa Universität bei Tokyo, wird mit Werner Zimmermann sprechen über „Japan heute“ und über sein Erziehungswerk. Vorgesehen sind bis jetzt:

5. Mai Donnerstag Zürich Konservatorium
6. Mai Freitag Bern Schulwarte
9. Mai Montag Wien Mozartsaal
10. Mai Dienstag München Dt. Museum
11. Mai Mittwoch Nürnberg Buchersäle
12. Mai Donnerstag Stuttgart Siegle-Haus
13. Mai Freitag Darmstadt Aula Ludwig-Georgs-Gymnasium
14. Mai Samstag Berlin Festsaal Schiller-Schule (Ernst-Reuter-Platz);
18. Mai Mittwoch Hamburg Curiohaus, Rothenbaum-Chaussee 9-13

Man erkundige sich örtlich über die Zeit des Beginnes und ob die Angaben stimmen. Die Mai-Ausgabe wird wahrscheinlich die endgültige Liste bringen können.

図2 (暫定版) 中央ヨーロッパにおける講演案内 (1955年)

東京近傍にある玉川大学の設立者で学長の小原國芳が、ヴェルナー・チンメルマンとともに「日本のいま」と彼の教育活動について語ります。

(Drei- Eichen- Blätter, 1955a, S.43)

ここでは、チンメルマンが通訳者であることは明記されていない。このように、「暫定版」の段階から比べれば、「最終版」では小原の講演であることが前面に押し出されていることがわかる。

さて、小原はこの一連の講演会でどのようなことを話したのか。次にその内容を追ってみることにする。

4. 海外講演 (1955年) の内容

この海外講演の内容はどのようなものであったのか。チンメルマンの著作『未来の学校』(1957年)には、小原の英語による原稿をドイツ語に翻訳したものが掲載されている。ただし、講演の最初の導入部分は省略されている。この点についてチンメルマンは、講演本体の内容は同じであるが、導入部分は訪問国によって

変えていたので掲載しない旨を説明している (Zimmermann, 1957, S. 10)。

チンメルマンによれば、講演は3部構成であったという。まず第一部で語られたのは、「12 の教育原則」 (Zwölf Leitsätze der Erziehung) である。これは玉川学園の「12 の教育信条」に相応するものである。講演時の順番で、12 の原則を挙げていくと次のようになる (Zimmermann, 1957, S. 10-24)。

1. 「全人教育」 (Erziehung des ganzen Menschen)
2. 「労作学校」 (Arbeitsschule)
3. 「自学自律」 (Selbst-Studium und Selbst-Disziplin)
4. 「個性尊重」 (Achtung der Persönlichkeit)
5. 「対立の調和」 (Harmonie der Gegensätze)
6. 「学問に基づく教育」 (Erziehung auf Grundlage der Wissenschaft)
7. 「能率的な教育」 (Leistungsfähige Erziehung)
8. 「人生の開拓者」 (Pioniere menschlichen Lebens)
9. 「自然への愛」 (Liebe zur Natur)
10. 「師弟間の信頼」 (Vertrauen zwischen Lehrern und Schülern)
11. 「『塾』教育」 ("Juku"-Erziehung)
12. 「世界的な教育」 (Weltweite Erziehung)

ところで、小原は、この海外講演の後、玉川学園創立 30 年の記念誌『玉川教育——玉川学園三十年——』に「玉川学園の教育目標」を掲載し、そこにおいて、現在「12 の教育信条」と呼ばれているものを「玉川教育十二信条」と呼び、それが「いつの間にか出来ました」と振り返っている (玉川学園編、1961、p. 23)。この「玉川教育十二信条」について、順番に示せば、次のようになる。

1. 全人教育
2. 個性尊重の教育
3. 自学自律
4. 能率高き教育
5. 学的根拠の上に立てる教育
6. 自然の尊重
7. 師弟間の温情
8. 労作教育
9. 反対の合一
10. 第二里行者と人生の開拓者
11. 塾教育
12. 国際教育

この12信条を先ほどの海外講演時の「12 の教育原則」と比べてみると、最も大きな違いは、現在、8 番目の

項目に挙げられている労作教育が、海外講演では、「労作学校」という表現で、2 番目に取り上げられている点である。エームケは前述の博士論文の中で、ヨーロッパの聴衆にとって、当時、よく知られていた「労作学校」の用語を用い、それを小原独自の「全人教育」を紹介する直後に持ってきたのであろうと予測している (Ehmcke, 1979, S. 141-142)。ただし、ここで挙げられている「労作学校」の講演内容では、ケルシェンシュタイナー (Georg Kerschensteiner) のことは一言も触れられていない。むしろ、「労作学校」について語る、その冒頭でペスタロッチー (Johann Heinrich Pestalozzi) を引き合いに出して、次のように述べている。

我々はペスタロッチーと共に、次のことを確信している。
すなわち、真の教育の根本に存在しうるのは、労作のみである。 (Zimmermann, 1957, S. 12)

無論、ケルシェンシュタイナーはペスタロッチーを継承し、彼の労作学校の思想と実践を展開した人物であり³、むしろ小原にとってケルシェンシュタイナーは共にペスタロッチーから影響を受けた同時代人の一人という位置づけになるのであろう。ただし、この「労作学校」の項目に入る前、つまり「12 の教育原則」の冒頭にある「全人教育」を語るにあたっても、小原はペスタロッチーを取り上げて、「ペスタロッチーは頭、心、手の三位一体を教育の目標として要求した」 (Zimmermann, 1957, S. 11) と語る。そして、頭 (Kopf)、心 (Herz)、手 (Hand) は英語では3つのH (Head、Heart、Hand) となるが、自分はさらに5つのH (Health、Honour、Humour、Honesty、Humanity) を玉川では結びつけていると語っている。さらに自分の弟子は、それにもう一つのH (Humbleness) を加えなければならないと言っている、とユーモアを交えて語っている。「12 の教育原則」における第3 番目「自学自律」においても、この原則は「労作学校の特長である」 (Zimmermann, 1957, S. 13) と語られ、第10 原則「師弟間の信頼」において、教師に「ペスタロッチーの精

³ 周知のように、ケルシェンシュタイナーは、1908 年 1 月、「ペスタロッチーの精神における未来の学校——労作学校」と題する記念講演を行い、子供が書物中心に学ぶことになる「書物学校」 (Buchschule) を批判し、「労作学校」への変革を訴えた。彼の考えをまとめた『労作学校概念』 (Begriff der Arbeitsschule, 1912) は各国語に翻訳され、彼は労作学校運動の立役者として評価されている。

神」を求め、さらに第11原則「『塾』教育」においても師弟による小規模の共同体生活の重要性を指摘するとともに、そうした小規模の共同体である家庭を、ペスタロッチャーも原細胞（Grundzelle）と見なしていたと述べている（Zimmermann, 1957, S. 22）。このように小原のヨーロッパ講演では、ペスタロッチャーと小原との結びつきを際立たせる形で講演が行われている点が特徴的である。

さて、本稿のテーマである小原の国際交流への視座を捉える上で重要な講演内容について見てみることにしよう。それはやはり、原則の12番目「国際教育」に登場する。まず、チンメルマンが2度目に玉川学園を訪れた際、「地球は我々の故郷である！」と語ったことが取り上げられ、これが学園の教師と児童生徒の心に染み入ったことが指摘されている。さらに、民族と民族との懸け橋になるべく、韓国、中国、東南アジアから多数の生徒を受け入れていることを取り上げ、「我々の心からの願いは、子供の心の透き通った純粋さを通して地球に平和をもたらし援助をすることである」（Zimmermann, 1957, S. 22）と結んでいる。また玉川から海外への子供たちの派遣や、外国から「最良の諸力」を手に入れるべく、パーカースト（Helen Parkurst）、シュナイダー（Hannes Schneider）、ブック（Niels Bukh）、シュプランガー（Eduard Spranger）ら著名な外国人を受け入れてきたことに言及している。そして、最後に自分たちの「高き目標」として「全ての人間が兄弟になる！」（Alle Menschen werden Brüder!）を語って終わるのである（Zimmermann, 1957, S. 24）。チンメルマンによると、講演の第一部はここまでであるが、この第一部が比較的長く、講演では、これに続く第二部を（部分的に引き合いに出されはするものの）省略せざるを得なかったと記している⁴。そして講演の締めくくりは、「戦後の日本」について語り、最後の言葉は、次の通りであったという。

西洋と東洋における光の友よ！ すべての人間が平和という幸福な故郷を自分たちの地球から作り出せるようお互いに助け合おうではないか！（Zimmermann, 1957, S. 32）

その他、第6原則「学問に基づく教育」の中でも、東洋と西洋において、過去と現在において永遠に価値

⁴ チンメルマンは講演第二部の題材の「いくつか」として、幼稚園から大学まで、さらに教師の継続教育までを擁する玉川学園の各機関や付置機関（出版部、購買部など）、塾の1日、年中行事を取り上げている。

がある最善のものに基づいて、玉川の教育を実践しようと努めてきたとしている。そして、今回の旅もそうした努力に属するものであると位置づけている（Zimmermann, 1957, S. 17）。

5. 海外講演（1955年）の評価

さて、小原による海外講演（1955年）は、どのように評価されたのであろうか。以下では、まず小原自身の自己評価、続いてチンメルマンによる評価、そして新聞記事の記述から見てみることにしよう。

(1) 小原による自己評価

小原は『世界教育行脚』の中で、端的に、「私の講演は方々で喜んでもらいました」（小原、1956、p. 196）と述べている。では、どのような点で喜ばれたのか。小原自身は続けて次のように述べている。

無一文で始めたこと。ホントの教育をやればキット交通はついて来るという信念。土地経営の智慧。全人教育論。特に労作教育の具体案。二元の反対の合一。高き能率の具体例のいろいろにはビックリしてくれました。

第二里精神。個性尊重と悪童物語。国際教育の実例として、デンマークから二十七名の体操教師の招聘、オーストリアからのシュナイダー氏招致、或いはナトルブ文庫の購入。ケルシェンシュタイナー文庫問題。アジア諸国からの留学生と親愛といったような例はトテモ喜んでくれました。殊に「反対の合一」を説明する実例——コヤシも汲めばピアノも弾け、ドブ浚えもすれば絵も描け、薪割りもやれば劇も演れ、拭き掃除もすれば「第九シムフォニー」も歌え、田植えもすればカントの批判書も読み、ソロバンも弾けば御経も繻くという実例を畳みかけると大喜びでした。

（小原、1956、p. 196-197）

ここに示されているように、「無一文」から学園を創設していく小原の半生のエピソードそのものが、喜ばれたと認識されている。続いて、「12の教育原則」のうち、1. 全人教育論、2. 労作学校、4. 個性尊重、5. 対立の調和、7. 能率的な教育、8. 人生の開拓者、12. 国際教育が、喜ばれたものとして取り上げられている。特に5. 対立の調和のところについては、「コヤシも汲めばピアノも弾け」といった独特の語りのスタイルも喜ばれたようである。いずれにせよ、小原が聴衆に合わせて語りの順番や内容に工夫を凝らした講演の多くの要素について、喜ばれたと自覚していることが示されている。

(2) チンメルマンの評価

チンメルマンによる小原の講演に関する評価は、『ドライ・アイヒェン・ブレッター』1955年8月号に記されている。それを列挙していくと次のようになる。

①「国際語」(Weltsprache)としての「輝く笑顔」(ein strahlendes Gesicht)の持ち主

輝く笑顔は、最良の国際語である。それを全世界の善良な人間は理解している。このことを我々は小原と彼の講演によって共に体験することができた。

(Zimmermann, 1955b, S.3)



写真1 ダルムシュタットの講演

(Drei-Eichen-Blätter, Folge 30, August 1955, S.9)

②「温かな共同体」(herzliche Gemeinschaft)を生む人柄

彼の人柄と彼の言葉が人々を心から感動させ、感激させた。講演の休憩時間に、彼は舞台に腰かけ、微笑みながら自分の本を見せて、風変わりな文字の説明をしたり、根気強く自分の名前をサインする時、幸運にも、即座に東洋と西洋との間に温かい共同体が感知された。

(Zimmermann, 1955b, S.3)

③円熟し、善良で、好かれている人間の持つ「無邪気さ」(Kindhaft)

小原に会ったことがあるであろう全ての人が最も強く印象づけられたのは、すなわち、円熟し、善良で好かれている人間の持つ無邪気さであった。…中略…みんなが彼を好み、うれしそうに彼と知り合いになろうとした。みんなにとって彼はすぐに故郷の一部ようになった。

(Zimmermann, 1955b, S.3)

④高い理想を独力で実現した人物

彼の12の正しい教育原則は深遠で卓越したものであり、あらゆる時代と民族に妥当する。…中略…高き理想と、明確な目標と方法！ けれども、さらに偉大なことは、すなわち、小原が最も困難な状況下でそれらを持ち、まったく独力で実現したことである。(Zimmermann, 1955b, S.4)

以上のように、チンメルマンが小原の海外講演から把握したのは、小原の優れた人間性であったと言える。講演内容もさることながら、それ以上に、講演に参加した人々にとって、小原の存在そのものが、東洋と西洋をつなぐ架け橋となりえていたのではなかろうか。

(3)『シュトゥットガルト・ツァイトゥング』における評価

1955年5月17日付の新聞『シュトゥットガルト・ツァイトゥング』(Stuttgarter Zeitung)の15頁には、「小原國芳教授——多数の子供たちにとっての慈悲深い父であり教師」の見出しで、1955年5月12日にグスタフ・ジエグレ・ハウス(Gustav-Siegle-Haus)(写真2、3)を会場として行われた小原の講演に関する記事が掲載されている。この記事は、講演会の5日後に公表されたものであり、5月12日の講演会の様子が反映されている(図3)。



写真2 シュトゥットガルトの講演会場Gustav-Siegle-Haus
外観(2013年2月19日現在、筆者撮影)

その記事は、①小原の人物像、②小原の経歴紹介、③小原の講演におけるメッセージを主な内容としている。以下では、順次これらについて説明していくことにする。

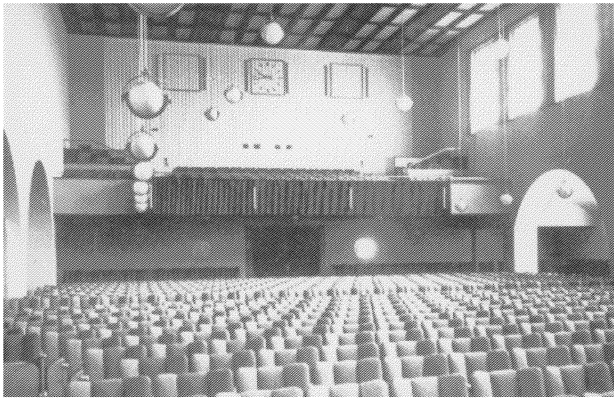


写真3 シュトゥットガルトの講演の会場内Der Große Saal (1954 当時)⁵

①小原の人物像

記事は、小原の人物像の紹介からスタートしている。そこに描かれているのはチンメルマンが描いたのと類似した小原の人柄についての記述である。記事によれば、「子供たちの輪の中で、まるで童話の語り手と同じように、慈悲深く微笑む白髪の男性」(Stuttgarter Zeitung, Dienstag, 17. Mai 1955, S.15)と小原は紹介されている。

②小原の経歴

小原の経歴に関しては、子供の頃、家は貧しく、苦労して自力で教養を身に付け、学資を得たこと、それゆえに他の貧しい子供たちを救いたいという願いを持ち、自力で東京から南西 40 キロのところに、幼稚園から大学までを擁する学園を創設したことが紹介されている。

③小原の講演におけるメッセージ

この記事では、講演の内容については、ほとんど触れていない。ただし、講演第一部の終わりに登場するベートーベンの交響曲第九番ニ短調第 4 楽章の一節「全ての人間が兄弟になる」(Alle Menschen werden Brüder!)と関連があると考えられる、類似した次の小原のメッセージが取り上げられている。

東洋と西洋の全ての人間は兄弟であり—そう彼は言う—そして平和のうちに共同生活ができるし、できればならない。

⁵ 100 Jahre Gustav-Siegle-Haus, Stuttgart, Stuttgart, Kulturamt [2012], S.5. (<http://www.stuttgart.de/img/mdb/publ/21317/80044.pdf>. 2015 年 2 月 19 日アクセス)。この写真は講演の前年のものであるが、ほぼ当時の会場内の様子を窺い知ることができよう。

(Stuttgarter Zeitung, Dienstag, 17. Mai 1955, S.15)

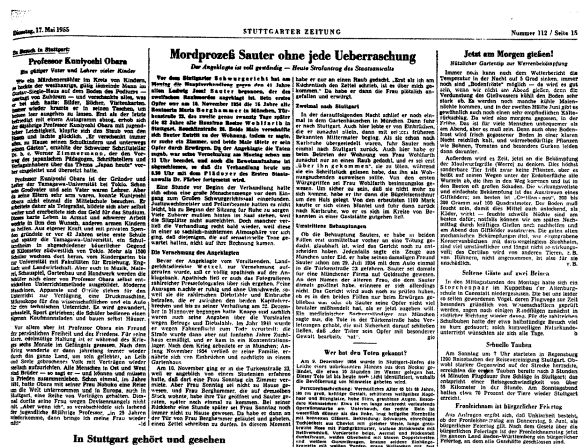


図3 Stuttgarter Zeitung 1955 年 5 月 17 日付 小原國芳に関する記事 (15 頁、4 段組み左端)

以上、海外講演 (1955 年) に関する小原自身の自己評価、チンメルマンの評価、および『シュトゥットガルト・ツァイトウング』の記述を一瞥した。これによって、小原自身とチンメルマン及び新聞記事との間には、取り上げる観点に違いがみられることが明らかになる。すなわち、小原自身は自らの「12 の教育原則」の多くの重要な要素が聴衆に理解され、喜ばれたことを指摘している。それに対して、チンメルマンと新聞記事においては、むしろ小原の人間性への積極的な評価が示されているのである。さらにチンメルマンは、小原と聴衆との交わりの中に、東洋と西洋との温かい共同体の形成を感知し、新聞記事は、小原の願いである平和へと向かう東洋と西洋の共同生活に着目している。

6. 国際交流と異文化理解をめぐる

以上、海外講演 (1955 年) の評価を追ってきたが、この講演の実現は、前述したように小原とチンメルマンの二人の親交によってもたらされたものである。二人が玉川学園で初めて会った時のことを、小原は次のように述懐している。

丁度、玉川学園を創設して、一カ年もたためホンの草分けの頃、ある日、私のチッポケな家の縁側のところに飄然と姿を現わしてくれました。日本にはじめて来て、どこか、東北旅行中、玉川のことを聞いて、矢も楯もたまらず来たんだそうです。頭に帽子もかぶらず、カラーもなく、無論ネクタイもなく、半ズボンで、クツ下もなく、裸足のままで革のワラジをはいて、リュックサック一つかついで、頭

髪は自然のままで、全く神武天皇の御再来かと思われるような風格でした。どこか、剽軽な、おどけたような何ともいえない親しみ深い自然児！ 一目で百年の知己！ といった不思議な魂の結び付きが出来てしまった二人の間柄です。どちらかが女だったら、一遍で夫婦というところですよ。

(小原、1956、p. 34)

「一度会ったその日から、肝胆相照らす仲となられたお二人だった」(石橋、1982、p. 19)と指摘されているとおり、二人はこの時、生涯にわたる深い友情で結ばれたのであった。チンメルマンは1930年に玉川学園をはじめて訪問し、それ以来、1949年、1953年、1958年、1977年、そして小原の他界後の1979年と6度にわたり玉川学園を訪問した。一方の小原は、チンメルマンの誘いを受けて1931年、信子夫人と共に初めての海外講演の旅へと出かけた。そして本稿で取り上げた1955年の海外講演もまた、チンメルマンの誘いを受けてのことであった。

さて、このように小原とチンメルマンは友情によって結びつき、共に国際交流に貢献したわけであるが、本稿の冒頭で示したように、近年、小原に関する批判的研究がドイツ語圏で発表されている。それによれば、確かにチンメルマンは「地球があらゆる人々の故郷である」と考え、小原も「全ての人間が兄弟になる」という表現を好んでいた。しかし、チンメルマンは「サイードの意味でのオリエンタリズム」(*Orientalismus im Sinne Said's*)に留まり(Ito, 2012, S. 48)、小原は「セルフオリエンタリズム」(*Selbstorientalismus*)の立場に立っていて、結局のところ、「チンメルマンも小原も異文化との真剣な取り組みを目論んではいなかった」(Ito, 2012, S. 49)と批判されている。この主張の妥当性について、以下において検討を加えてみたい。

まず、「サイードの意味でのオリエンタリズム」と記されているが、この言辞そのものが問題性を孕むことを指摘しておかねばならない。パレスチナの著名な知識人であるサイードが発表した『オリエンタリズム』(1978年)は、その発表以来、この問題をめぐる活発な議論を呼び起こした書物として高く評価されている。しかし、本書は注意深く扱わなければならない。なぜならば、サイードが「本書は、オリエンタリズムの完全な歴史あるいは一般的叙述からは、まだほど遠いところにある。この弱点を私は十分に承知している」(サイード、1993a、p. 64； Said, 2003, p. 24)と述べているように、研究の射程を極めて限定しているから

である。本書でサイードが扱う「オリエンタリズム」とは、主に中東（とくにアラブ・イスラム）世界であり、彼が本書で取り上げている「オリエンタリズム」は、主に十八世紀以降のイギリス・フランス・アメリカのそれである。彼は次のように述べている。

さらに私は、……すでに限定された（それでもまだ法外に広範な）問題群を、英・仏・米のアラブおよびイスラムをめぐる経験にさらに限定した。なぜなら、アラブとイスラムこそ、およそ一千年にわたって共にオリエンタを代表してきたものだからである。こうした限定はとりもなおさずオリエンタの広大な部分を占めるインド、日本、中国、その他の極東地域を除外することに等しい。しかしそれは、我々がこれらの諸地域の重要性を認めないからではなく（それらは明らかに重要であった）、ヨーロッパの近東ないしイスラムについての経験を極東についての経験から切り離して論ずることが可能だからである。

(サイード、1993a、p. 49-50； Said, 2003, p. 16-17)

つまり、本書においてはアラブ・イスラム世界がオリエンタを代表してきたものとして扱われており、それはインド、日本、中国から切り離して論じることが可能なため、限定した研究を行うとしている。そして彼は次のようにも述べている。

本書を、数巻からなる全集の最初の一巻とみなしてみずからを慰めている。続巻を書いてみようという学者や批評家が現れることを期待する。……こうした後続の研究においては、オリエンタリズムと教育論との結びつきが、イタリア、オランダ、ドイツ、スイスのオリエンタリズムが、学術書と文学作品とのあいだの力学的関係が、また統治思想と知的規律＝訓練との関係などが、徹底的に論じられることが望ましい。

(サイード、1993a、p. 64-65； Said, 2003, p. 24)

したがって、サイードが次のようにオリエンタリズムについて語るとき、それを直ちに、ドイツやスイスと日本との関係性の文脈に入れ込むことは適切ではない。

オリエンタリズムは、ヨーロッパとアジアという世界の二つの部分の差異の感覚をますます硬化化させるような方向に文化一般の圧力を増大させることになり、逆にまた、そうした文化的圧力によって、オリエンタリズムはますます強められてもきたのだった。オリエンタリズムとは、オリエンタが西洋より弱かったためにオリエンタの上におしつ

けられた、本質的に政治的な教義なのであり、それはオリエントのもつ異質性をその弱さにつけこんで無視しようとするものであった。これが私の主張の要点なのである。

(サイード、1993b, p. 17 ; Said, 2003, p. 204)

この引用で用いられているオリエンタリズム、ヨーロッパ、アジアという言葉は、オリエンタリズム一般、ヨーロッパ一般、アジア一般に直ちに妥当するものではない。つまりサイードは、本人自身としては、少なくとも、「そもそもオリエンタリズムというものは」「ヨーロッパというものは」「アジアというものは」といった一般化された論調を否定しているのである。もしサイードの本書を用いるのなら、彼が慎重に彼の研究対象を絞り込んだことに即して、限定的な意味で用いる必要があるだろう。したがって、「サイードの意味におけるオリエンタリズム」の立場から、スイスのチンメルマンと日本の小原の関係性を読み解くという作業自体、無理があると言わざるを得ない。また、「セルフオリエンタリズム」(Selbstorientalismus)という言葉は、サイードのものではなく、村井(2001)から援用されている(Ito, 2012, S. 48)。しかし、村井のセルフオリエンタリズムに関する説明は、サイードのオリエンタリズム論との関連でなされており、この言葉は「自らの内側に内面化された西洋中心主義、言い換えれば自己^{セルフ}オリエンタリズム」(村井、2001、p. 173)と説明されている。これもサイードの主張を前提とする限り、そのまま小原に当てはめて考えるのは適切とは言えない。前述のとおり、サイードは自らの著作『オリエンタリズム』を「数巻からなる全集の最初の一巻」と呼んでいるが、スイス、ドイツ、そして日本に関する個別具体的な今後の研究は、少なくとも、この「最初の一巻」ではない。これは重要な点である。

さて、前述の小原に関する批判的研究の中で「チンメルマンも小原も異文化との真剣な取り組みを目論んではいなかった」(Ito, 2012, S. 49)とされる点について、次に検討をしていきたい。ここでは、紙幅の都合により、小原に対する批判のポイントだけを取り上げることにする。小原のチンメルマンに対する関係について、次のように述べられている。

小原は、チンメルマンのもとに、——日本の塾の伝統におけるように——理想的な教育観を見出したと信じていた。しかしながらその際、彼はチンメルマンの教育の根本としての自由経済のことには注意を払わなかった。

(Ito, 2012, S. 48-49)

チンメルマンは、ドイツ人実業家で経済学者のゲゼル(Silvio Gesell)が展開した「自由経済」(Freiwirtschaft)の考えを、さらに広めようとしていたという。この点に関して、小原はチンメルマンの考えを受け入れようとはしていなかった点が、前述の異文化との真剣な取り組みのなさとして批判されている。しかし、異文化理解のみならず、一般的に他者を理解するということは、ボルノー(Otto Friedrich Bollnow)が指摘する通り、「無批判的承認」(kritiklose Billigung)と同義ではなく、みずからの内に「承認」(Billigung)と「拒否」(Mißbilligung)との可能性を含むものである(Bollnow, 1982, S. 74)。したがって、相手の考えを承認しなかったことがただちに無理解を意味するものではない点に注意しなければならない。むしろ相互理解が進めば進むほど、かえってお互いの差異が明らかになり、相手の考えを承認できないといった事態も生じるのではあるまいか。問題は、いかにして、こうしたお互いの差異を寛容の態度で受けとめていけるかではなかろうか。さらにこうした差異が、いかにして、お互いにとっての「豊饒化のモメント」(尹、1987、p. 31)になりうるか。これが国際交流及び国際教育の重要な課題であると言えよう。この困難な課題に対しては、即座に解答できるわけではない。しかし、小原もチンメルマンも、異文化に生きるお互い同士が交わりを続けるということに、一つの可能性を見い出していたと考えられる。

小原は、ヨーロッパにおける海外講演(1955年)を終えて、南米へと旅立つにあたって、チンメルマンをはじめ、ヨーロッパでお世話になった人たちのことを次のように書き記している。

ホントに、チン博士は、三十五日間、全く、親身になって、兄弟のように、親切にしてくれました。「地球は我等の故郷である」という信条をそのまま実現してくれました。…中略…ヨーロッパの幾多のお世話になった人たち、ホントに、ありがとう！ ゼヒ、日本にも！ 待っています。貧しい私の家を日本でのヤドにして下さい！ 十日でも二十日も。妻も子たちも 生徒たちも心から待っています！ お互、メイメイの家を、世界中、みんなのために故郷にしたものです。(小原、1969、p. 317)

また、チンメルマンも小原との講演旅行の締めくくりのところで、次のように記している。

こうして、われわれの創造的な自由と平和の共同体がわれわれの地球をめぐる成長していく。多くの人たちが個人的に知り合いになれるということが、どれほど大切か！

(Zimmermann, 1955b, S.13)

小原とチンメルマンが、それぞれこのような実感を抱いたのは、とりもなおさず、実際に二人が国際交流を実践し続けていたからに他ならない。

7. おわりに

小原やチンメルマンにとって、国際交流とは、何よりもまず、異文化に生きる人間同士の具体的な交わりの実践にあったと見ることができる。見ず知らずの他者であったお互い同士が、知り合い、親身になっていく。このようなプロセスは、ノディングズ (Nel Noddings) の言う「身近な他者」(the proximate other) への転換を彷彿とさせる。「身近な他者」とは、「わたしに話しかける者であり、わたしが眼差しを向ける者である」(ノディングズ、1997、p. 176; Noddings, 2013, p. 113)。見ず知らずの他者に対しては、心から親身になることは難しいが、「身近な他者」に対しては、それが可能になってくる。その意味で、小原やチンメルマンが実践したように、国際交流の場で、実際にお互い同士が知り合っていくことは重要である。

本稿は、小原の海外講演 (1955 年) に関する資料を手がかりに、彼の国際交流への視座が、異文化に生きる具体的な人間同士の交わりを重視している点にあることを示した。今後は、1931 年及び 1938 年の海外講演・旅行に関する資料、教師や生徒らの海外派遣、および海外からの訪問者や留学生の受け入れに関する資料をもとに、さらに小原の国際交流の実際について研究を進めていきたい。

引用・参考文献

- 石橋哲成 (1982) 「チンメルマン博士と小原國芳先生」『全人教育』411 号、p. 18-20
- 伊藤敏子 (2004) 「新教育運動とメタファー：ツインマーマンにおける『太陽』のメタファーを軸として」『三重大学教育学部研究紀要 教育科学』55 号、p. 133-144
- 小原國芳 (1956) 『世界教育行脚』全集 6、玉川大学出版部
- 小原國芳 (1969) 『教育講演行脚・身辺雑記(5)』全集 25、玉川大学出版部
- サイード、E. W. (板垣雄三ほか監修) (1993a) 『オリエンタリズム』上、平凡社
- サイード、E. W. (板垣雄三ほか監修) (1993b) 『オリエンタリ

- ズム』下、平凡社
- 玉川学園編 (1961) 『玉川教育—玉川学園三十年—』第 3 版、玉川大学出版部
- ノディングズ、N. (立山善康ほか訳) (1997) 『ケアリング 倫理と道德の教育』晃洋書房
- 南日本新聞社編 (1977) 『教育とわが生涯 小原國芳』玉川大学出版部
- 村井寛志 (2001) 「オリエンタリズム、セルフ・オリエンタリズム、ネイティヴィズム、オクシデンタリズム」、姜尚中編『ポストコロニアリズム』作品社、p. 172-173
- 尹健次 (1987) 『異質との共存——戦後日本の教育・思想・民族論』岩波書店
- Bollnow, O. F., (1982), *Studien zur Hermeneutik*, Bd. I., Freiburg/ München: Verlag Karl Alber., S. 73-102 .
- Drei-Eichen-Verlag, (1955a). Vorträge. Werner Zimmermann mit Obara, in: *Drei-Eichen-Blätter*, Folge 26, S.43.
- Drei-Eichen-Verlag, (1955b). Vorträge Obara und Werner Zimmermann, in: *Drei-Eichen-Blätter*, Folge 27, S.41.
- Ehmcke, Franziska., (1979), *Die Erziehungsphilosophie von Obara Kuniyoshi. Dargestellt an der "Erziehung des gazen Menschen". Ein Beitrag zur Erziehung in Japan*, Hamburg : Ges. für Natur- u. Völkerkunde Ostasiens.
- Ito, Toshiko., (2012), Transzendenz und Orientalismus in der Reformpädagogik. Eine Fallstudie zur Kooperation zwischen Werner Zimmermann und Kuniyoshi Obara. In: *Bildungsgeschichte. International Journal for the Historiography of Education*, 1-2012, S. 36-50.
- Noddings, Nel., (2013), *Caring: A Relational Approach to Ethics & Moral Education*, second Edition, updated, Berkeley and Los Angeles, California: University of California Press.
- Said, E. W., (2003). *Orientalism*, London: Penguin Books Ltd.
- Zimmermann, Werner., (1954). *Licht im Osten, Geistiges Nippon*, München: Drei Eichen Verlag .
- Zimmermann, Werner., (1955a). Obara. Vom Kinde her erneuert sich die Welt, in: *Drei-Eichen-Blätter*, Folge 27, S.3-13.
- Zimmermann, Werner., (1955b). Japans Pestalozzi. Bericht über unsere Vortragsreise, in: *Drei-Eichen-Blätter*, Folge 30, S.3-13.
- Zimmermann, Werner., (1957). *Die Schule, der die Zukunft gehört, Leben und Werk von Künizoshi Obara*, München : Das große Gedeihen.